

子どもたちのための中世

Jacques Le Goff: Das Mittelalter für Kinder

(翻訳)

武 田 輝 章

Teruaki TAKEDA

序論

若い読者とそれよりは年長の読者のために

現在を理解するには過去を知ることが大事である。どれほどわたしたちが過去を引きずっているのか、何がわたしたちを過去から切りはなしているのか、これを知るために大事なのである。

だれよりも過去を理解しているのは、とくに子どもたちや若い人たちに説明できるのは歴史家である。過去にはすべてそれぞれはっきりとした特徴があるが、その過去を分類していくのが歴史家だからだ。「中世」とよばれる時代の場合、まず「その時代がどれくらいつづいたのか」と「その時代がどんな意味をもったのか」という二つの問題が出てくる。これは、中世という時代が肯定的にも否定的にも評価されているために出てくる問題である。

中世に刺激をうけて著述家たちは歴史小説を書き、なかには大成功をおさめてきた作品もある。映画が生まれてからは監督たちが多くの映画を作り、観客たちを、とくに子どもたちを夢中にさせてきた。本当のところ中世とは何であったのか、中世は現代のわたしたちにとってどんな意味をもっているのか、これをきみたちにもっと説明しようというのがこの本のねらいだ。

第1章

中世はどれくらい続いたのか。それは「良い」時代だったのか、「悪い」時代だったのか。

「学校では15世紀と16世紀がルネサンスの時代で、17世紀はバロックの時代、18世紀が啓蒙主義の時代だとならいました。でも、中世はいつはじまっていつ終わったのですか。」

中世はとても長く続いたんだ。少なくとも1000年はね。中世が話題に出ると、たしかに紀元1000年から1500年の間の時代と考える場合が多い。でも本当はそれより500年も早い紀元500年より少し

前、つまり西暦の紀元後500年には中世ははじまっていたのさ。476年にローマ皇帝はローマから追放され、オドアケルという名のゲルマン将軍にとってかわられた。これはローマ帝国のおわりを意味した。少なくともヨーロッパの西部ではね。というのは、東部ではコンスタンチノープルを首都とする帝国がつづいたからね。しかし、これには単なる政治的事件以上の意味があったんだ。すなわち、これが古代のおわりであったということだ。

「でも王様が退位したり、王や皇帝一族の王朝が絶えるたびに時代がおわるというわけではないでしょう。」

まさしくそのとおりだね。でも西暦紀元5世紀には、これとは別のとても大きな変化がいくつもおきたのだよ。4世紀には、ローマ人たちが「野蛮人」とよんでいた民族たちがローマ帝国へ侵入してきて、すでに民族大移動がはじまっていたのさ。北からはゲルマン人やスカンディナヴィア人が、北西部からはケルト人が、東からはゴート人、ハンガリー人、スラブ民族がやってきた。「侵入」というと、わたしたちは帝国をのりこえて流れこみ、すべてを荒らしまわる野蛮な暴力集団をおもいおこすね。しかし自分たちの行く道をおだやかに移動して、さらに南へ行って定住する人たちもいたんだよ。バイキングの例を見てみよう。きみたちは、バイキングがフランスのノルマンディー海岸に上陸して、背後の土地を略奪して荒らすようすを描いた絵を見たことがあるかもしれないね。しかし、バイキングの中には北の国々から貿易をするためにきた商人たちもいて、その後イギリスの島々やフランスに定住した人もいたんだ。

「宗教もそのとき変わったのですか。」

そうだよ。でも民族移動が理由ではなかった。すでに4、5世紀、ローマの皇帝たちがキリスト教に改宗した後には、ローマ帝国はキリスト教化されていたのさ。多くの神や女神をもつローマの宗教をキリスト教徒たちは異教とよんでいたが、その異教はキリスト教化によっておしまいになった。こうして異教はほぼすみやかに消えていった。決して完全にというわけではないが、しだいにキリスト教に地位をゆずったんだね。多くの異教の神々がたった一人の神に、旧約聖書と新約聖書というバイブルの神にとってかわられた。もっとも、キリスト教徒の神には父と息子と精霊という三者がふくまれてはいるがね。当時、「野蛮人たち」ですら洗礼させられてキリスト教徒になったというわけだ。フランスで最も有名な改宗者はフランク族の王 Chlodwig (紀元後500年ころ)だ。伝説の主張するところでは、彼は王妃 Chlotilde の願いを聞きいれてキリスト教に改宗したといわれているよ。

「それは伝説だったのですか。」

そうだ。わたしはわざと「伝説の主張するところでは」といったのさ。きみたちに気づいてもらいたかったのは、とくに中世初期の時点では、歴史家が自由に使える記録はわずかしかなかったことであり、たとえば Chlodwig の改宗物語のような保存文書では、出来事は実際におきたとおりには必ずしも描かれないということだ。つまり、こうした記録は批判的な眼で考察しなければならないし、別の記録—わたしたち歴史家が「原点」とよんでいるもの—と比較しなければならないということだ。これらの物語を書きしめた人たちには、それを書くはっきりとした意図があったんだね。今の例でいえば、その後フランスとなった国が、はじめからキリスト教国であったということを示すことが重要だったのさ。でも、実際にはすべてのことははるかに複雑だったんだよ。

「学校の先生も、中世の時代は<長い>と話してくれましたよ。」

先生のおっしゃるとおりだね。中世がいつ終わったかという問題については多くの議論があるんだ。きみたちに「1500年ころ」といったのは、きみたちの教科書にそう書いてあるからさ。教科書にしたがえば14世紀のおわりころ、まずイタリアで、その後残りのヨーロッパでもルネッサンスという新しい時代がはじまった。学習指導案では、ここを「新時代」のはじまりとしている。しかし一部の歴史家の見るところでは、わたしもそのひとりなのだが、実は中世は18世紀のおわりまでつづいたのさ。

「どうしてですか。」

簡単にいうと、社会生活を完全に変わってしまった三つの事件がそのときはじめにおこったからだ。あるいはこういったほうがいいだろう。西洋・ヨーロッパの社会変化、とくにイギリス、フランス、スカンディナヴィアのような先に進んでいたいくつかの国々の社会変化だ。事件の一つは、まず自然科学がまったく異常な発達をとげたことだ。自然科学は、精密な器械と厳密な研究方法をますます発展させた。

二つめは、さまざまな科学分野が進歩した結果、17世紀のおわりころにはますます効率的な機械ができて投入され、製造過程をいっそう加速させる工業技術が発展しはじめたことだ。イギリスで、フランス人 Denis Papin とイギリス人 Thomas Savery が、1698年に最初の蒸気機関を設計した。いかえると、これがいわゆる「産業革命」のはじまりだったのさ。

そして三つめにきたのが、政治分野における革命、とくにフランス革命だ。フランス革命はフランスとヨーロッパの歴史、いや全世界の歴史の転換点となったんだ。フランス革命の意味は、絶対主義支配体制という古い政治形態がおわったこと、「封建支配」とよばれて「暗黒」の中世の象徴

となった支配体制が歴史から退場したことだ。

「でも、〈中世〉ということばはいったいどこからきたのですか。なぜ〈まん中の〉時代とされているのですか。」

これは中世という時代が進んでいくうちに、とくにそのおわりごろにできあがった考え方だよ。それも、最初は学者や芸術家のあいだでひろまったものだ。彼らは自分たちが過ごしてきたばかりの数世紀を一わたしたちから見ればこれが中世の中核をなしているのだが—中間点であり過渡期であると感じたんだね。しかし、同時に暗い時代であると、理想とみなしてきた古代とくらべれば没落の時代だと感じたのさ。えらびぬかれた文化とみなされていた古典古代の文化を、かれらはもう一度見たいと思った。この感情は14世紀末と15世紀初頭、とくに人文主義者といわれるイタリアの詩人たちのあいだで生まれたんだ。中世キリスト教がみとめていた特性、すなわち神を前にした人間の重い罪を強調する特性とは別のものが、人間のなかには存在するとかれらは信じたのさ。

しかしもっと別の理由もあるよ。とくに啓蒙主義の時代である18世紀の人々は、中世の人たちとその文化に対して強い軽蔑の念をいだいていたんだ。神を信じることは人間の理性をしめ出すことだから、中世は暗黒の時代だ、というのが広く行きわたっていた考え方だ。人文主義者や啓蒙主義者の時代には、中世とよばれるこれらの世紀を偉大で芸術的なものにしたのは何であったのか、などと考える人間は出てこなかったのさ。

ようするに「まん中の」時代とは、これよりは良かったとみなされた二つの時代、古代と近代の中間にある時代ということだ。近代のはじまりはルネサンスだったが、これは「15、6世紀というこの時代に古代が再生した」という意味をいいあらわした概念さ。あたかも中世は幕間劇にすぎなかったといわんばかりにね。

「つまり、〈暗黒〉の中世という観念はあったけれども、このイメージ一色ではなかったということですね。」

そのとおり。中世のなかにふたたび美と偉大とをとりもどしたのは、19世紀のロマン派とよばれる作家たちだ。それはなぜか。いつも中世の大聖堂との関連で使われる「ゴシック」ということばは、このときまではまだ口にされていなかった。ところが、ルネサンスになってはじめて使われた「ゴシック」ということばは、フランス語ではかつて「野蛮」という意味だった。中世を「暗い」と表現した人たちは、中世の芸術を野蛮だと見ていたわけだ。だがロマン派は、洗練されたすばらしいこのゴシック芸術を、とくに大聖堂の芸術をほめたたえた。その賞賛の一例が、ビクトル・ユゴーの『ノートルダムの鐘つき男』だ。この名前のついたパリ中心部の大聖堂には、あいかかわらず大勢の訪問客がおしかけているが、この小説が不滅の記念碑をうちたてたのさ。

しかし、今日でもなお「暗黒の中世」と「黄金の中世」という二つのイメージが存在することはみとめなければならない。「われわれはもはや中世に生きているのではない」とはよく聞かれる言い回しだし、教養ある人でもこれを口にする。ある事柄やある人物をたとえて「中世的」と表現することは、今でもほめことばとしていわれることはないからね。

「でも、それは完全な間違いともいえないでしょう。」

わたしならこういっただろうね。中世は、ロマン派の多くが評価したような黄金時代ではなかったが、その弱点や嫌悪すべき側面にもかかわらず、人文主義者や啓蒙主義者が広めようとしたイメージの、悲しい暗黒時代でもなかったのだとね。わたしたちは中世を全体として見なくてはいけない。これから述べていくように、中世は古代とくらべると多くの点で進歩的で発展した時代だったんだ。もちろん「暗黒」の中世が存在したこともたしかさ。貴族は農民を抑圧したし、教会は不寛容で、意見の違う者を異端者とよんで異端審問所にひきわたした。審問所はかれらを拷問にかけ、謀反人としてまきの山で火あぶりにした。飢饉にみまわれることもまれではなかったし、貧しい人たちも多かった。不安もあった。たとえば海洋や森林にたいする不安、そして悪魔にたいするはげしい不安もあった。でも、わたしたち現代人だって、ずっと多くのものに不安を感じているじゃないか。なかでも、たとえば地球外物質や原爆にたいするきわめて現実的な不安は、これらよりはるかに不気味な不安さ。

しかし、とくに子どもたちをいつもびっくりさせる「美しい」中世もある。たとえば、騎士、お城、大聖堂、ロマネスク芸術、ゴシック芸術、教会窓の色彩、あるいは祭りなどだ。また、忘れられていることがあまりに多いのだが、中世の女性は男性と同じ地位に立っていたわけではないにしても、それ以前のどの時代の女性とくらべても、たとえ古代アテネの女性たちとくらべてさえ、いっそう正当で同等で輝かしい社会的地位を占めていたし、獲得してもいたのだ。それだけでなく—このことはいずれ必ずまた話題にするが—中世は「ヨーロッパ」が誕生した時代でもあったのだよ。

「「ヨーロッパ」とおっしゃいましたか。」

そのとおり。ヨーロッパの起源は中世にある、というのがきわめて重要な点だ。古代ローマの文化が支配したのは、ヨーロッパの一部分、おおよそ地中海に面した南の地域だけだった。ようやく4世紀になってから、北部の国々（ドイツのライン川右岸地域と後にはスカンディナヴィア半島）、西部の国々（ブルターニュ、イングランド、アイルランド）、東部の国々（ハンガリーと中央ヨーロッパの国々）は、共通の政治と宗教をもつ地域となったのであり、まさしくこれがその後のヨーロッパを形成することになったのだ。

「紀元後500年ころに、ローマ帝国の統一がくずれたといえるのですか。」

まさしくそのとおりだ。この時から、後のヨーロッパの新住民たちが一つひとつまとまって住みつき、定住地域からはやがて国が生まれることになる。その先頭に立ったのが、多くは新しいひとりの重要人物、今でも「王」とよばれている人物だったのだよ。

「そして、これがローマ帝国で話されていた言語、ラテン語のおわりでもあったのですか。」

北部では新参者の定住が進むにつれ、かれらは自分たち本来の言語を使いつづけることになった。もっとも、ラテン語からの借用は好きなだけなされたがね。ラテン語は学者や教養人のことばとなり、書きことばとなって14世紀までつづいた。ローマ帝国で話されていたラテン語は、南の国々では数世紀にわたって多種多様な発展を続けた。こうして<ロマンス語>が生まれたのさ。フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、それによく忘れられるがルーマニア語もね。

「1年か2年後には、わたしたちはラテン語を学ぶべきかどうかを決めなくてはなりません。どんなアドバイスをされますか。」

ラテン語を知ることで、過去の遺産を理解できる点は重要だと思うよ。精神科学の仕事につきたいと思うなら、かなり多くのラテン語を学ぶ学校をえらぶほうがいいだろうね。自然科学のほうに魅力を感じるなら、ラテン語の少ない学校をえらびなさい。でも、全くラテン語をかえりみないというのではいけないよ。最小限度でもいいから、ラテン語の知識があれば将来きつときみたちの役にたつだろう、というのがわたしの意見だよ。

「それで、ローマ帝国東半分の言語だった、ギリシャ語は西側では完全にすたれたのですか。」

そうだ。ギリシャ語圏だったローマ帝国の東半分は、ビザンチン帝国というまったく独自の世界をつくった。その頂点にはひきつづき皇帝が君臨し、ビザンチンに、あるいはコンスタンチノープルといったほうがいいが、ここに居住した。この街はギリシャ教会、いわゆる東方正教会の本拠地で、その指導者はローマ法王につぐ階級を要求したんだ。

西方のキリスト教徒は、政治的にはまもなく（7世紀以来）ビザンチン帝国の支配から開放された。両教会はしだいにはなれていき、最終的には11世紀になってわかれることになった。

<ローマ・西洋>のキリスト教徒と<ビザンチン・東洋>のキリスト教徒との関係は、とくに緊密というわけではなく、ひどく悪化することもありにはあった。聖地のイスラム教徒にたいしてお

こなわれた十字軍遠征で、ローマのキリスト教は1204年、ついにコンスタンチノープルを占領して略奪したんだ。

最終章

中世は長期にわたる時代だった。中世は、18世紀末の近代産業誕生時点やフランス革命にまでおよぶとわたしは考えているが、たとえそのように考えなくても、一般的にいつても5世紀から15世紀間の10世紀をこえてつづいた時代とみなされている。つまり、これだけでも1000年はつづいたのだよ。

この長く続いた時代がちょうど中世という名称は、ルネサンス時代に名づけられたもので、最初は価値のないものとみなされていた。わたしたちが見てきたように、中世をひどい時代、「邪悪な」時代、暴力的で暗黒で無知の時代とみなす人は今でも多いよ。中世に多くの暴力が存在した事実はあったが、しかしこのイメージはまちがいであることが今のわたしたちにはわかっているね。いくつかの集団や国どうしの争いや戦争における暴力だけでなく、ユダヤ人排斥主義のはじまりとなったユダヤ人への暴力もあったし、宗教裁判を利用して、教会の教えに反抗して「異端者」というレッテルをはられた人々への暴力的抑圧もあった。もちろん、十字軍もこの否定的な総決算のひとつに加えなければならないね。

しかし、中世は創造的な時代でもあったのさ。わたしはむしろこの点を評価したいのだよ。これが見てとれるのは芸術の分野であり、とくに街の中にある、たとえば大学のような研究施設の分野だ。しかし、思想の領域においても、「スコラ哲学」とよばれた哲学は精神史の頂点に達したんだ。さらにわたしたちは、中世がいかに広範な「出会いの場」をつくり出してきたかを、商売のために人々はここにあつまり祝うためにここにつどいあったことを見てきた。これらは見本市や市場や祭りとなり、これらのおかげでわたしたちは今でもワクワクすることができるのだよ。

ヨーロッパの誕生

ところで、中世では多様性と統一性が奇妙につなが合わされることになったんだ。多様性が見てとれるのは、しだいに国家が生まれ出たことだよ。9世紀以来フランスとドイツが生まれ、11世紀末にイギリスが生まれ、イザベラ・フォン・カスティリエンがフェルディナント・フォン・アラゴンと結婚してカスティリエンとアラゴンが統合された15世紀終わりごろに、スペインが生まれた。統一性、あるいは少なくとも統一のひとつの形は、各地で定着したキリスト教によって生み出されたんだ。この宗教は、すでに述べたように、聖職者と俗人とを区別することを知っていた。だから、全般的に見て、非聖職者の世俗的社会が生じたのは中世であるといえるのさ。授業のやりかたもヨーロッパ中で同じだった。もうラテン語で教えてはいないが、今日でも大学は高次の知識を伝える場

所だよね。これにくわえて偉大な芸術的遺産が存在しており、これがわたしたちすべてを結びつけているのだ。

このように、中世とは、ヨーロッパがはじめて姿をあらわし形づくられた時代であったといつてよい。歴史的発展の枠内で、一つひとつの文化的時代が一定の役割を演じ一定の課題をみたすとき、中世の役割とはヨーロッパの誕生と成長を準備することだったといえるのだよ。今日のわたしたちの仕事は、このヨーロッパを完成させることさ。中世はヨーロッパに統一性と多様性を同時にめざす動きを残してくれたが、わたしたちが完成への靈感をえるとしたらその点にしかないだろうね。

中世の書物にはほとんど登場しない「ヨーロッパ」という概念が、15世紀半ばになって、ローマ教皇ピウス二世の、ある書物のタイトルにあらわれるのは偶然ではないよ。そうした見方をすれば、15世紀というこの時期に、ヨーロッパはその完成への第一歩を築いていたという考え方もなりたつのか。

中世：他者と自己との出会い

きみたちが中世と関わる時、きみたちが中世の遺産、とりわけ文化遺産を観察するとき、この時代が今日のわたしたちの時代と、今のヨーロッパといかに違うかに気づくことだろう。きみたちは外国旅行をしたような印象をもつはずだ。あたかもエジプトやインドや中国、あるいは中南米を旅したかのようにね。決して中世をもう一度復活させることが目的ではないよ。しかし、わたしたちは忘れたくないのさ。この時代の男性や女性たちがわたしたちの祖先なのだということ。この時代がわたしたちの過去の重要な瞬間であったことを。それゆえ、わたしたちにとって中世への旅は、他者との出会いであると同時にわたしたち自身との出会いでもあるという、二重の喜びをもたらすクリスマスプレゼントだということね。

原注

原著について

原版は Editions du Seuil よりフランス語のタイトル *Le Moyen Âge expliqué aux enfants* で、2006年に出版された。ドイツ語版は、Ursula Vones-Liebenstein の翻訳で2007年に C. H. Beck より出版された。

著者について

Jacques Le Goff は、現在最も有名で最も読まれている歴史家のひとりである。彼が受けた様々な賞の中には、ミュンスター市の歴史家賞とシュトゥットガルト市のヘーゲル賞がある。C. H. Beck 社で最近出版された著作には次のものがある：『中世におけるヨーロッパの誕生』（2004年）、『中世を探して』（2004年）、『中世の奇跡—騎士・一角獣・トルバドゥール・英雄』（2005年）。

注

翻訳はドイツ語版の以下の部分である.

DAS MITTELALTER FÜR KINDER erklärt von JACQUES LE GOFF

Verlag C. H. Beck oHG, München 2007

- (1) EINLEITUNG Für junge ... und ältere Leser S.9-S.10
- (2) 1. KAPITEL Wie lange dauerte das Mittelalter?
War es eine «gute» oder eine «schlimme» Zeit? S.11-S.20
- (3) SCHLUSS Die Geburt Europas S.101-S.104

(2010年11月30日 受理)